様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２６ 年　 ５ 月 ２８ 日現在

機関番号：１０１０３
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2011～2013
課題番号：２３５２０５４０

研究課題名（和文）旧椴法華村における伝統的漁業・造船に関する語彙調査

研究課題名（英文）The Vocabulary Research on Traditional Fishery and Shipbuilding in Todohokke

研究代表者
橋本　邦彦（HASHIMOTO, Kunihiko）

室蘭工業大学・工学（系）研究科（研究院）・教授

研究者番号：８０１５６２８１

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　1,300,000円、（間接経費）　390,000円

研究成果の概要（和文）：平成23年から25年度にかけて6回の実地調査を実施した。調査地域は旧椴法華村を含む渡島半島東岸部だけではなく、隣接する西岸部及び青森県である。この調査により新たに3名の調査協力者を得て、波、潮、風などの海事関連の語彙や漁具、漁法、魚加工に関係した語彙と事物のデータを収集することができた。また、調査地域の博物館や郷土資料館を訪問し、貴重な文献を多数手に入れることができた。これらの資料に基づいて、項目別に語彙を整理し、意味、用法、用例、文献からの引用、協力者から提供された新情報から成る語彙集を論文の形で発表した。収集されたデータは、音の分析や統語・意味論的な研究の論文としても公刊された。

研究成果の概要（英文）：We did fieldwork six times from April, 2011 to March, 2014. The research region is the eastern part of the Oshima Peninsula including Todohokke, as well as the western coastof the peninsula and Amomori Prefecture. Since the field trips gave us three new informants, we collected not only a lot of words related to fishery and maritime phenomena, but also many interesting books, pictures and documents by visiting museums located in the regions. They led us to publish several challenging papers about dialectal fishery vocabulary, and about the phonetic, syntactic and semantic studies of the Todohokke dialect.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・日本語学

キーワード：伝統的　漁業　造船　語彙調査

１．研究開始当初の背景

(1) 北海道道南部渡島半島東岸部に位置する旧椴法華村（平成 16 年 12 月より函館市に編入合併）の方言調査は、これまでに国立国語研究所の要請を受けた石垣福雄氏による実地調査が行われている。

石垣福雄 (1978) 『方言緊急調査　文字化原稿、椴法華村』

石垣福雄 (1980) 『北海道（昭和 55 年度）各地方方言収集調査　文字化原稿、椴法華村』

(2) 上記の調査は、旧椴法華村在住の明治・大正・昭和初期生まれの男女にいくつかの話題を提供して、自由に戦前、戦後の村の生活や風習等について話し合ってもらった内容を筆記・記録したものである。どれも貴重な証言であるが、文字化原稿そのものは公刊されていない。ただし、一部資料は、次に挙げる出版物に反映されているようである。

石垣福雄 (1982)「北海道沿岸部の方言」、『講座方言学 4　北海道東北地方の方言』、63-92 頁、国書刊行会

平山輝夫、小野米一、石垣福雄、道場優 (1997) 『北海道のことば』　明治書院

(3) これらの研究では、椴法華方言はあくまで渡島半島沿岸部方言の一構成要素として取り上げるだけで、その地理的特殊性から見ての掘り下げた考察はなされていないばかりか、方言と密接に関連した事物についての言及もわずかである。特に、戦前からの基幹産業である漁業及び和船技術に基づく造船に特化した語彙‐事物‐営みの三位一体の調査・研究はほとんど手がつけられていない状況にある。

２．研究の目的

(1) 旧椴法華村（現在、函館市）の位置する渡島半島東岸部地域は、古くから和人の入植が行われた土地であり、独特な方言や風習がよく保存されてきた地域である。しかし、平成 16 年の大合併により函館市に編入された影響などから、その方言と関連する伝統文化が急速に失われつつある。そこで、基幹産業の漁業・造船関係の中から、方言に関連した語彙と事物を調査・記録・保存することにより、方言研究や文化人類学研究に貴重な資料を提供しようとすることが、本研究の主な目的である。

(2) 高齢化や言語文化の平準化により、当該地域の方言や伝統は絶滅の危機に瀕していると言っても過言ではない。学術研究の重要な使命の一つとして、グローバリーゼーションだけではなく、グローカリーゼーション（Glocalization：世界規模の視点で地域の独自性に着目しそれを活用すること)にも目配りする姿勢が要求される。したがって、できるだけ早くこの調査・研究が安定した状況の中で実施されることには、重要な意義があると考えられる。

(3) 収集したデータ資料に基づき語彙集及び事例集を作成し発表すると同時に、実地調査に協力していただいた方々に、郷土教育と文化の継承に使用できる形で研究成果を還元していくことで、椴法華方言と伝統文化の維持継承に寄与できる。

３．研究の方法

(1) 旧椴法華村とその周辺地域の方言関係資料及び漁業・造船関係資料を収集し、そこから伝統的な漁業・造船に関連した方言語彙情報を抽出する。

(2) 北海道の漁業・造船に関連した語彙情報を抽出し、項目ごとに整理する。

(3) 旧椴法華村方言についての検証項目の整理をする。その上で、聞き取り調査用の質問項目の整理と質問項目の設定を行う。

(4) 作成した質問項目に基づいて、 旧椴法華在住の元船大工、漁師等地元の人々に伝統的な漁業と造船に関する聞き取り調査を実施し、記録すると共に、音声データは DVD-R に保存し、漁具・工具及び実際の労働作業についての身振りによる説明はデジタルビデオカメラに保存する。

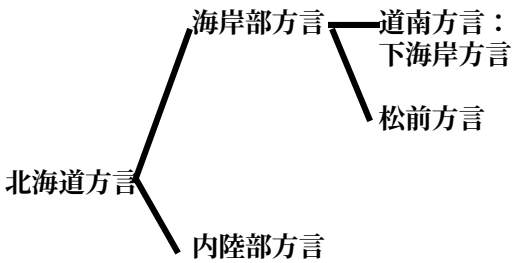
(5) 記録したデータを、渡島地方出身者の協力の下で文字化、共通語訳する。

(6) 上記作業によって得られたデータを編纂し、音声及び画像のデジタルデータを記録した DVD-R を添付した写真つき方言資料集を作成する。作成した資料は、調査協力者の校閲を受け、必要な修正を施して完成させる。

４．研究成果

(1) 旧椴法華村は山の多い狭隘な土地であるために農業はふるわず、明治から今日に至るまで基幹産業は漁業であった。恵山沖は豊かな魚田として知られ、夏と秋のイワシ漁、夏のイカ漁、冬のタラ漁に加えて、沿岸部ではコンブ漁が盛んに行われてきた。その他に、ホッケ、ブリ、タコなども漁獲される。この地域が松前町を含む日本海側の渡島半島西岸部と決定的に異なるのは、ニシン漁が盛んではなかったということである。このことから、東岸部と西岸部の漁具、漁法に関連した語彙に違いのあることが予想された。

(2) 方言について、石垣福雄(1980)『北海道（昭和 55 年度）各地方言収集緊急調査　文字化原稿　椴法華村』＜未公刊原稿＞の中で、北海道方言を次のように分類している。



上記分類図で椴法華方言は下海岸方言を中核として、津軽海峡を隔てた対岸の青森県下北半島方言の要素を濃厚に反映していると言われている。本研究・調査は、旧椴法華村を中心とする渡島半島東岸部地方の漁業の特色と分類図に示された方言の位置づけとが交差するところで実施された。このところにおいてこそ、渡島半島東岸部の漁業に関連する語彙の特徴が顕著に顕れると考えられたからである。

(3) 10年余りに渡ってインフォーマントとして調査に協力してもらった元漁師の方と元船大工の方が相次いで鬼籍に入り、実地調査の継続に暗雲が立ち込めたかに見えた。幸いにもその後、地元のガソリンスタンド経営者から2名の現役漁師夫妻を紹介していただいた。また、この経営者自身も漁師の家の出身で、昔の漁業関連の事柄にかなり精通していることがわかった。3名とも70歳代で、旧椴法華村に生まれ、現在に至るまでこの地に在住し続けている。彼らとの面談で、前任の80歳代の協力者が使用したか知っていた語彙を本人たちはもはや使わない、もしくはまったく知らないという事実が明らかになった。たとえば、イカ釣り漁法は、戦前から戦後にかけて大きく変化してきたが、一つの漁法が新たな漁法に移行すると、それに伴って、漁具の語彙がごっそりと忘れ去られてしまうのである。同様に、70歳代の協力者の知っている天候、潮流、風などの語彙も、スマートフォンとGPSからの情報で漁に出る若い世代の漁師にとって未知のものとなりつつある。漁業に関わる語彙は、世代間ごとに変遷し、かなりの規模の数が一挙に失われ得ることがわかった。

(4) 風、波、潮流などの自然現象に関連する語彙は、用いられる土地の地理的条件に大きく依存している。同じ語彙であっても、使用される地域によって指示対象や意味内容の異なる場合があるのだということが、本調査で判明した。これは、魚の加工処理という人間の営みに関わる語彙にも当てはまる。調査地域を渡島半島西岸部に広げたことで、漁獲される魚種により、たとえば、西岸部でニシンの加工に用いられる語彙が、東岸部ではイワシの加工に使用される場合のあることがわかった。隣接する地域内での比較の観点に立った方言語彙の地域差に着目することの重要性が認識されたわけである。

(5) 各地域の郷土館や博物館を丹念に訪れたことで、伝統的な漁具や道具、漁船などの展示物に出会う機会を得た。その過程で、書庫に埋もれていた貴重な資料を発見した。また、学芸員と情報を交換する中で紀要や自費出版の形で公刊された論文や研究報告、事典等の提供を受けた。さらに、市町村史の存在を知り、教育委員会を通して、あるいは古書店を介して、かなりの文献を集めることができた。

(6) これらの調査で得られたデータは、従来、個々別々に散在していたのであるが、カテゴリー別の語彙集・資料集をまとめる作業により、体系的に見渡せるようにした。たとえば、「シカタカゼ」の項目では、意味・用法・用例だけではなく、それについて他の文献で言及されている説明・情報、聞き取り調査で得られた知見などを同時に見ることが可能になった。

(7) 旧椴法華村を中心とする渡島半島東岸部の方言的語彙の特徴は、実は、隣接する諸地域、西岸部、積丹・余市・小樽・石狩、津軽半島・下北半島を含む青森県、さらに新潟県、福井県など北陸地方の語彙と比較することで、より鮮明になることを理解するに至った。いわゆる比較方言語彙研究の観点は、今後のこの分野の研究の広がりと将来性を示唆しているように思われる。

(8) 今回の研究成果には、方言語彙の音声学的分析、格表示の意味・機能、ハワイ語の漁業関連語彙との比較などが含まれている。これは、方言語彙研究が限られた地域でのローカルな領域に止まるだけではなく、グローバルな領域の研究にまで広がり得る可能性を示唆している。方言研究は一般言語学、言語類型論、対照言語学等に寄与できる事実を証明したのである。

　たとえば、格表示の意味・機能の研究では、次の事実が明らかとなった。椴法華方言話者は主格及び対格の名詞句について、格助詞を用いずにゼロ表示で示すという強い傾向があるが、これは特に対格の名詞句について顕著な特徴である。また、椴法華方言を含む海岸部方言の特徴とされる対格の格助詞「バ」の使用頻度は高くない。標準語の「ニ・ヘ」に対応する「サ」は、方向・目的地あるいは動作の対象を表すのに多用される一方で、変化の結果、行為の目的等他の用法に対応するところではあまり用いられない傾向がある。

　椴法華方言を含む道南方言とハワイ語について、ウニ、海藻、イカ・タコの3つのジャンルの水産物の語彙に関する比較研究では、ウニを指す総称的な語が両言語において存在せず、いくつかの種類を語彙的に明確に区別することがわかった。海藻類については、

ハワイ語では総称的名称の下に100を越える語彙を持っているに対し、道南方言では、二種類のコンブを指す語彙と、コンブの身体部位を表す語彙があり、かなり複雑な語彙体系を発達させていった。タコ・イカでは、ハワイ語はタコに関して細かな分類や身体部位名称を有しているのに比べ、道南方言では、イカについて細密な語彙を発達させている。3つのジャンルの比較を通して、人々の関心の高さ・積極性とそれを話す人々の言語の語彙との関係が明らかとなった。

音声学的分析では、椴法華方言における「潮」と「塩」の発音を音響分析の手法で考察した。調査で採集された音声資料を聴取すると、本来の「シオ」が「スオ」または「ソ」として発音されている例が見出された。これまで「シオ」が「ショ」と発音される報告はあったが、「ソ」と発音されると指摘されることはなかった。そこで「ソ」と発音されているサンプルを選択し、音響分析を行い、その結果をもともと「ソ」と発音されているサンプルと比較した。その結果、両者の間に差がないことが示されたのである。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　9件）

① 橋本邦彦、椴法華村における「風」及び「潮」・「波」に関連した方言語彙について、北海道言語文化研究、査読有、第12号、2014、3-23

② 島田武、椴法華方言における「潮」、「塩」の発音について－個人レベルでの一事例－、北海道言語文化研究、査読有、第12号、2014、25-32

③ 塩谷亨、道南方言とハワイ語における水産物語彙について、北海道言語文化研究、査読有、第12号、2014、33-42

④ 島田武、橋本邦彦、塩谷亨、寺田昭夫、椴法華方言における「リ」の具現について－「リ」と「ル」の区別の消失と残存－、北海道言語文化研究、査読有、第11号、2013、3-8

⑤ 塩谷亨、椴法華方言話者の格表示マーカーの使用について、北海道言語文化研究、査読有、第11号、2013、9-20

⑥ 橋本邦彦、島田武、戦争前後の椴法華村の暮らし、北海道言語文化研究、査読有、第11号、2013、21-47

⑦ 橋本邦彦、渡島半島東岸部の漁業及び海事関係の語彙について、室蘭工業大学紀要、査読有、第62号、2013、69-80

⑧ 橋本邦彦、渡島半島東岸部の漁業関係の語彙、北海道言語文化研究、査読有、第10号、2012、23-37

⑨ 橋本邦彦、島田武、塩谷亨、椴法華の漁業について、室蘭工業大学紀要、査読有、第61号、2012、77-88

〔学会発表〕（計　3件）

① 塩谷亨、島田武、橋本邦彦、旧椴法華の漁業関連語彙について、北海道言語研究会例会、2013年9月27日、室蘭工業大学、室蘭市

② 橋本邦彦、渡島半島東岸部の漁船・漁法・漁具関係の語彙について、北海道言語研究会例会、2012年3月19日、室蘭工業大学、室蘭市

③ 島田武、椴法華方言調査とその音声、日本実験言語学会第4回大会、2011年9月2日、室蘭工業大学、室蘭市

〔その他〕

ホームページ等

http://www3.muroran-it.ac.jp/hlc/index.html

６．研究組織

(1)研究代表者

橋本　邦彦（HASHIMOTO, Kunihiko）

室蘭工業大学・工学研究科・教授

研究者番号：80156281

(2)研究分担者

塩谷　亨（SHIONOYA, Toru）

室蘭工業大学・工学研究科・教授

研究者番号：10281867

(3)研究分担者

島田　武（SHIMADA, Takeshi）

室蘭工業大学・工学研究科・准教授

研究者番号：90322875